結社誌を訪ねて

中原　修子

こんなにも椿咲くゆゑものわすれ

山尾　玉藻
「火星」六月号

「ものわすれ」の原因を、作者は老いや耄碌ではなく、「こんなにも咲く椿」のせいなのだと考えています。そこに、この句の鷹揚さと可笑しみ、そして救いがあります。椿は一色ではなさそうです。赤、白、桃色、あるいは絞り模様の花びらまで、庭いっぱいに咲き誇っているのでしょう。あまりの華やかさに心を奪われ、自分がいま何をしようとしていたのかさえ忘れてしまった。そんな景が見えてきます。本来、もの忘れは加齢とともに訪れる、どこか寂しさを伴う現実です。人はそれを何とかしようともがき、ときに不安に陥ります。しかし作者は、それを嘆こうとはしません。「椿がこれほど咲いているのだから、仕方がない。」そう言って、老いを季節の豊かさへと軽やかに転じてみせるのです。椿の艶やかな生命力と、「ものわすれ」という言葉との意外な取り合わせ、そして両者のほどよい距離感が、この句に独特の余韻と微笑みを生み出しています。

踏み締めて春の雪とは鳴かぬ雪

阿部　良子
「鶴」六月号

この句の魅力は、「春の雪」を視覚ではなく、聴覚によって捉えているところにあります。冬の雪は、厳しい寒さの中で乾ききっており、踏めば「きゅっ、きゅっ」と高く澄んだ音を立てます。北国の人なら誰もが知る、あの凍てつく朝の足音です。けれども、春の雪は違います。陽光を含み、少しずつ融け、水を抱き込んだ雪は、足裏に沈んでいくだけで声を上げません。「春の雪とは」と、一度言葉を置くことで、作者は冬の雪との違いを読者に意識させています。雪が鳴かないのは、春が来た証です。それは単なる季節の移ろいではありません。冬の雪の鳴き声が、厳しさや孤独、寒さそのものの声であるとするならば、鳴かなくなった雪は、それらが少しずつ和らいでゆくことを告げているのです。寒さに耐える季節には、人間も同様に心のどこかで「鳴いて」いるのかもしれません。けれど、春の雪はもう鳴きません。寒さに身を縮める日々は終わり、陽光の中へと歩み出す時が来たのだという、心の解放までも感じさせる作品です。

燭交はす以心伝心阪神忌

左近　静子
「ひいらぎ」六月号

阪神忌とは、一九九五年一月十七日に起こった阪神・淡路大震災を悼む季語です。正月の華やぎがようやく薄れた早朝、突然襲った激震は、六千人を超える尊い命を奪いました。関西では毎年、鎮魂の思いを込めて無数の蝋燭が灯されます。その灯火は犠牲者への祈りであると同時に、震災の記憶を未来へ伝える小さな光でもあります。掲句の「燭交はす」は、単に蝋燭の火を移し合う動

作を表しているだけではありません。一つの火が次の火へと受け渡されるように、悲しみや祈り、そして震災の記憶までもが、人から人へ受け継がれてゆく姿が重ねられているように感じます。さらに「以心伝心」という四字熟語が置かれたことで、言葉を尽くさずとも互いの思いが通じ合う、被災地の絆や連帯感が鮮やかに浮かび上がります。「燭交はす」「以心伝心」と漢語調の語を重ねたことによって、句全体に荘重な響きと力強いリズムも生まれています。また、「以心伝心阪神忌」に含まれる「しん」という音の連なりが、歯切れのよい余韻を残しています。

大根の葉に大根といふ付録　仲　寒蟬

「牧」夏号

大胆でユーモラスな発想に、思わず頬が緩みます。私たちはふだん、白く太い「大根」の部分こそが主役であり、葉のほうは添え物、あるいは捨てられる部分と考えがちです。しかし植物として見れば、本来の「根」は土の中の白い部分であり、青々と茂る葉こそが地上に現れた本体なのです。作者は、その常識をあえて鮮やかにひっくり返してみせます。「大根」に葉が付いているのではなく、「葉に大根という付録が添えられている」のだ、と。「付録」という言葉の選択が絶妙です。雑誌の付録のように、主役はあくまで葉であり、白い根の部分はおまけに過ぎない、そんな逆転した視点が、鮮やかな笑いを生み出しています。

私たちが当たり前と思い込んでいる価値の序列など、少し見方を変えればいとも簡単に覆ってしまいます。その痛快さこそが、この作品の大きな魅力です。

音立てず走るナースや冴返る　森垣　一成

「伊吹嶺」六月号

兼好法師は、『徒然草』の「友とするにわろき者」の一つとして、「病なく身強き人」を挙げています。病を得た者にしか見えない世界があり、また病む者の心に寄り添えるのも、同じ経験をした者なのです。掲句には、病床にある者だけが知る深夜の病院の情景が描かれています。灯りは落とされ、物音は吸い込まれるように消え、静寂だけが長い廊下を満たしています。その静寂を破るように、しかし実際にはほとんど音を立てることなく、看護師が廊下を走ってゆきます。おそらく誰かがナースコールを押したのでしょう。柔らかな靴底が足音を吸い取り、病室にいる患者は、かすかな空気の動きや人影の気配によってのみ、その疾走を知ります。作者の耳に届くのは足音ではなく、むしろ「音の無さ」そのものなのです。春が近づき、いったん緩んだ寒さがふいに戻ることをいう「冴返る」という季語は、夜半の病院に漂う張りつめた冷気や、人の生死の境に寄り添う医療の現場の厳しさとも響き合っています。作者があえて「看護師」ではなく「ナース」としたのは、ナースコールを想起させるためでしょう。そこには制度や職業としての呼称ではなく、病床から見上げた先にいる白衣の人への親しみや感謝の念が込められているはずです。

（筆者住所　〒310-0853　茨城県水戸市平須町一八二八―五七一）